

パリ、ジュテーム

2007(平成19)年1月23日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



製作＝クローディ・オサル／原案＝トリストan・カルネ／監督・脚本＝ブリュノ・ポダリデス(1話)、グリンダ・チャーダ(2話)、ガス・ヴァン・サント(3話)、ジョエル&イサン・コーエン(4話)、ウォルター・サレス&ダニエラ・トマス(5話)、クリストファー・ドイル(6話)、イサベル・コイシェ(7話)、諏訪敦彦(8話)、シルヴァン・ショメ(9話)、アルフォンソ・キュアロン(10話)、オリヴィエ・アサヤス(11話)、オリヴァー・シュミッツ(12話)、リチャード・ラグラヴェネーズ(13話)、ヴィンチェンゾ・ナタリ(14話)、ウェス・クレイヴン(15話)、トム・ティクヴァ(16話)、フレデリック・オービュルタン&ジェラルド・ドパルデュー(17話、監督のみ)、アレクサンダー・ペイン(18話)／出演＝フロランス・ミュレル、ブリュノ・ポダリデス(1話)／レイラ・ベクティ、シリラ・デクール(2話)／マリアヌ・フェイスフル、イライアス・マッコネル、ギャスパール・ウリエル(3話)／ステイーヴ・ブシェミ、ジュリー・バタイユ、アクセル・キエネール(4話)／カタリーナ・サンディノ・モレノ(5話)／リー・シェン、バーベット・シュローダー(6話)／ミランダ・リチャードソン、セルジオ・カステリット、レオノール・ワトリング(7話)／ジュリエット・ピノシュ、ウィレム・デフォー、イポリット・ジラルド(8話)／ヨランド・モロー、ポール・パトナー(9話)／ニック・ノルティ、リュディヴィーヌ・サニエ(10話)／マギー・ギレンホール、リオネル・ドレイ(11話)／アイサ・マイガ、セイドウ・ボロ(12話)／ファニー・アルダン、ボブ・ホスキンス(13話)／イライジャ・ウッド、オルガ・キュリレンコ(14話)／エミリー・モーティマー、ルーファス・シーウェル、アレクサンダー・ペイン(15話)／ナタリー・ポートマン、メルキオール・ベスロン(16話)／ジーナ・ローランズ(脚本も)、ベン・ギャザラ、ジェラルド・ドパルデュー(17話)／マーゴ・マーティンデル(18話)(東宝東和配給/2006年フランス、ドイツ合作映画/120分)

第7章

たまには変わった趣向で

……私は本来オムニバス映画や短編ものは嫌いだが、これだけ世界各国の監督と俳優たちがパリに結集し、各5分、全18話でパリの魅力をあらゆる視点から描けば話は別……？ あらゆる物語にパリの魅力と香りがいっぱいだが、地名や歴史そしてさまざまなセリフの意味を十分勉強しなければ、ホンモノの香りは楽しめないかも……？ 地図とガイド本を片手にじっくりと鑑賞を……。



すばらしい企画に大拍手！

エッフェル塔・凱旋門・シャンゼリゼ大通り、セーヌ河・モンマルトル・カル

チェラタン、エリゼ宮・ルーヴル美術館・オペラ座、そしてサルトル・ボーヴォワール等々、パリには有名なものや人が多い。この映画はそんなパリの魅力に焦点をあてて、18人の監督がそれぞれ5分の短編モノを完成させたもの。トリスタン・カルネの原案を基に、クローディ・オサールがプロデュースするについて留意したのは、合計20区あるパリ市内をバランスよく取り上げること。18人の監督たちはそれぞれが設定した地区を舞台に、5分間のストーリーの構想を練り、喜劇や悲劇、若者の恋愛や熟年の離婚、そして観光モノからヴァンパイアものまで、バラエティー豊かなジャンルの物語を完成させた。

私は基本的にオムニバス映画や短編モノは好きではなく、2006年12月14日に観た『ユメ十夜』(06年)もボロクソにけなしたが、ちょうど2時間の18話のパリにまつわる物語には大感激！

日本から参加した諏訪敦彦監督を含めた世界中の監督と、私の大好きなナタリー・ポートマンを含めた世界中の著名な俳優たちが次々とこの企画に参加したのは、何よりもパリの魅力に惹かれたため。

ジャン＝リュック・ゴダールやエリック・ロメールも参加した、ヌーヴェルヴァーグの頂点をきわめた映画が『パリところどころ』(65年)とのことだが、それから40年後の今、新たなパリ映画の傑作がここに誕生したというわけだ。まずは、こんなすばらしい企画に大拍手！

18年前のパリは……？

2000年以降、中国旅行づいてる私だが、それでも私は、1988年8月22日～9月5日までの2週間、イギリス(ロンドン)・オランダ(アムステルダム)・西ドイツ(フランクフルト)・スイス・フランス(パリ)の5カ国を回り、ヨーロッパの「都市再開発」の実情を視察し、あわせて観光もしてきた(その詳細はホームページの旅行記「ヨーロッパ 視察の記」を参照)。

パリの一流ホテル「クリヨン」に泊まってパリの再開発の視察をしたのは、①イタリー地区、②ベンビル地区、③ラ・デファンス地区の3地区だったが、足がパンパンになるまで歩き回っても、1、2日ではその視察や観光はたかが知れているのは当然。したがって、私にとってパリはまだほとんど未知の国……。

ところで、この映画のプレスシートにはパリ市内の地図がついており、そこに18の物語の舞台が図示されている。したがって、今度はパリの再開発の視察ではなく、パリの魅力発掘旅行として、この18の物語で描かれた舞台を訪れてみたいもの。もっとも、まだまだ現役で弁護士稼業と映画評論家稼業に精を出している現状では、それは10年先の夢……？

たとえば第1話は……？

全18話はそれぞれ5分の短編ながら、よくできたものが多い。本当はそれを1つ1つ紹介したいが、それでは長くなりすぎるので、いくつか印象に残ったものだけを……。

第1話は、『アメリ』(01年)をはじめ多くの映画の舞台となったモンマルトル地区。ここはピカソをはじめ、芸術家が愛したまちとして日本でも有名。この映画を観た機会にパリのガイド本を勉強してみると、似顔絵描きが集まっているのがテルトル広場だが、その周辺は古き良き時代の雰囲気が残る小道が四方八方に入り組んでいるとのこと。

そんなモンマルトル地区だが、第1話がテーマにしたのは何と交通渋滞と駐車問題……？ プレスシートには、「前後の車にバンパーをぶつけ、強引に駐車スペースを確保するさまは、パリではお馴染みの光景だ」と書かれてあるし、スクリーン上でもそんな風景がくり広げられるから驚き。

主人公の男が、やっと確保できた駐車スペースで車の中から外を見ながら孤独な自分自身をふり返っていると、車の側で突如黒いコートの女性が倒れたから大変。「私は救命士の資格を持っています」と言いながら彼女を看護する中で、さてどんな物語が生まれてくるのだろうか……？

たとえば第6話は……？

私の大好きな中国人女優張曼玉が、パリ13区のチャイナタウンに生きる可憐な鍼灸師をフランス語のセリフで演じた『オーギュスタン／恋々風塵』(99年)は、フランスの香りいっぱいの魅力的な映画で、中仏の文化交流にも大きく貢献……？ (『シネマルーム9』329頁参照)

第6話の舞台にそれと同じ13区が登場したのは、ウォン・カーウェイ監督とのコンビで香港や台湾で大活躍するクリストファー・ドイルが監督・脚本したため。

舞台はチャイナタウンにあるマダム・リーの美容室で、主人公はシャンプーのセールスマンのミスター・アイニーという男。このアイニーという名前がポイントで、これは中国語で書けば「愛你」、つまりフランス語で「ジュテーム」（あなたを愛してる）の意味。当初手荒いカンフーの歓迎をうけた彼が、チャイナタウンを後にする時には……？

たとえば第8話は……？

ただ1人日本から参加した諏訪敦彦監督が、『トリコロール／青の愛』（93年）、『イングリッシュ・ペイシエント』（96年）、『ショコラ』（00年）等で有名なフランス人女優ジュリエット・ビノシュを起用してつくったのが、第8話の『ヴィクトワール広場』。これは最愛の息子を1週間前に亡くした母親の悲しみをテーマとしたものだが、「ママ、カウボーイは今もいるんだよ」というセリフがキーワード。

私はもちろんヴィクトワール広場へ行ったことはないが、ここはファッション・ブティックが軒を連ねる地区らしい。したがって、そんなところに突然馬に乗ったカウボーイが登場したら……？ アジア的な雰囲気は全くないが、死者のもとへ案内するカウボーイという発想はいかにも奇抜。その狙いやイメージしているものは、さて……？

たとえば第13話は……？

ヨーロッパ旅行の際、私はオランダで「飾り窓の女」を見学（？）したことがあるが、当然フランスにもそんな歓楽街がある。それが赤い灯・青い灯が灯る歓楽街ピガールとのこと。バーで1杯ひっかけた後、「覗き部屋」に入り、女の子と交渉しているところへ入ってきたのは、バーで短い会話を交わす中、思わせぶりな目配せをしてきた中年女。女の子を見物役に、2人はいいムードになりかけたが、実は……？ 芸達者な2人の中年俳優が織りなす不可思議な世界には、いかにもパリの香りが……。

たとえば第16話は……？

第16話には、『スター・ウォーズ エピソード1～3』（99年、02年、05年）でフィーバーし、『クローサー』（04年）や『Vフォー・ヴェンデッタ』（05年）ですばらしい魅力を見せつけた、超注目女優ナタリー・ポートマンが登場する。

映画の冒頭、彼女の絶叫の声が聞こえてくるが、それはひもに監禁されて逃げられない娼婦役のセリフ練習をしていたため。しかし、その側を通りかかった盲目の学生はそれとは知らず、つい声をかけた……。

そこから始まった2人の恋だったが、春が過ぎ夏が過ぎた頃には、彼女から別れを告げる長いセリフの電話が……。

さて、これは彼女の本心、それともこれもセリフの練習……？ わずか5分の中に、おしゃれな物語がいっぱい……。

たとえば第17話は……？

カルチェラタンといえば、ソルボンヌ大学を中心とした学生のまちとして有名。そんなカルチェラタンのとあるレストランを舞台として展開されるのは、意外にも(?) 熟年離婚を話し合う夫婦の物語だが、さすが『パリ、ジュテーム』に登場するだけあって、実に面白い人間模様がピッシリ……。アメリカからやってきた初老の男には、何と妊娠3カ月の若い愛人がいるが、妻の方も実は若いつばめがいる様子……。

なぜ2人が注文したワインが、レストランのオーナーからのおごりになるのかよくわからないが、2人の名優の静かだが丁々発止の演技に、パリが見える……？ さらに、2人のおしゃれにもご注目……。

たとえば第18話は……？

第18話は14区のモンパルナス地区が舞台。1人旅でアメリカから憧れのパリにやってきた太っちょの中年おばさんは、郵便配達の仕事に従事しているだけに行動的……？

そんな彼女が、パリを一望するのはパリのランドマーク、56階建てのモンパル

ナス・タワーの屋上から。そして、彼女が何かを悟るのはモンスーリ公園の中。わずか5分の物語だけでも、パリのモンパルナス地区の魅力が見えてくるが、ホントは自分の足でこのおばさんの後を追ってみたいもの……。

ポストプロダクションが大変……？

ポストプロダクションとは何か、次の4つの中から選べ。

- (ア) 撮影済みのフィルムの搬送作業などを行うプロダクション
- (イ) 資金難などの理由で撮影が中断した作品の製作を引き継ぐプロダクション
- (ウ) 撮影されたカットについての記録を担当する作業の総称
- (エ) 編集や音入れ、CGなどの合成作業など、撮影後の作業の総称

これが2006年12月3日に実施されたキネマ旬報社とキネマ旬報映画総合研究所主催の第2回映画検定3級の問54の問題。答えはもちろん(エ)。

そういう知識がなければ、この映画のプレスシートに書いてあるポストプロダクションの大変さを理解することができないことに……。編集前の『パリ、ジュテーム』は、まるで巨大なルービックキューブのようだったと表現されているが、実際に上映されたのは、何と81番目のバージョンとのこと……。そんなポストプロダクションの結果生み出されたのは、全18話が終了した後に、異なる物語の登場人物たちが交錯するシーンを持つてくること。

これによって、世界各国の監督や俳優たちがパリに集まり、パリの各地区を舞台としてパリの魅力を描こうとしたこの映画が見事な「つながり」を持つことに……。もっとも、『ユメ十夜』でもそうだったが、全18話ともなるとエンドロールがやたら長いのがちょっと苦痛……？

2007(平成19)年1月24日記